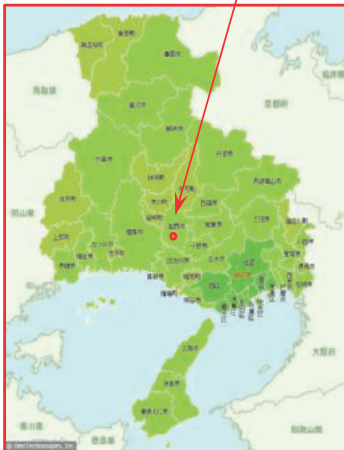


「田畑と社寺を囲んで」

令和7年7月 筆者： 中崎 剛

【兵庫県】

兵庫県加西市窪田町



(写真1-1) 【水田と集落】



大阪工場を63歳で退職し、郷里の兵庫県へ移って13年になります。今住んでいるのは北播州の加西市。人口4万人ほどで往時は門前宿場町として栄え、今は製造業等もありますが、いわゆる米どころの農村エリアです。

その中で、私の守備範囲は2反余りの水田と、家の前の少しの野菜畑とあったところでしょうか。土地・家は妻の実家で、農業はほぼ素人ではありましたが、居住十年を過ぎてようやく少し要領を覚えてきたところです。

ひと昔前は農業(稲作)も労働集約型の産業でしたが今は営農組合組織になっている所も多く、田植え、稲刈りなどの重作業は田植え機、刈取り機(コンバイン)などが能率よくこなしてくれます。個人は何をしているかと言うと主に農機の補助作業、トラクターの入れない畦畔(いわゆる畦)の草刈り、水田への水路の点検・維持、田の水位の管理などです。(写真-1-1、1-2)

(写真1-2) 【畦畔(あぜ)の草刈り】



(写真-2) 【干瓢を作ってみました】



一面の水田はあるべくしてあるように見えますが、先人達の工夫した巧妙な水路により維持されておりオーバーフローした水なども漏らさず再利用するなど、近年のSDGsを思わせるものがあります。

農繁期の草刈り(刈払機)は暑く、重い仕事ですが刈り終えた後の満足感は爽快なものがあります。とはいえ田の雑草対応、畑では空からの鳥害、山からの獣対策等、筆舌につくせないものもありますが、田の恵み(米)、畑の恵み(野菜類)を自ら得ることができ、季節に応じた生活のなかで「マイペース・それなり」といった感覚はあります。(写真-2)

また農村エリアでは一般に各集落に神社(天神社・天満宮とも)とお寺が建立されています。地区を束ねる大きな神社では、秋に化粧屋台が出て秋祭りが催されます。兵庫(神戸)など関西では、だんじり形式が多いようですが、播州地方では灘の喧嘩祭りに見られる屋台(やたい)と呼ぶ、人が担ぐ神輿式です。(写真-3)私も騒ぐのがきらいではないので70歳くらいまでは担ぎ手に参加しました。40人くらいが一斉に屋台を担ぎ上げるときの一体感と感動はなかなかのものです。



(写真-3) 【化粧屋台の神社奉納】



(写真-4) 【西国御詠歌】

一方お寺では以前は様々な行事もあったようですが、今当所では5月の「花祭り」と9月の「地藏盆」を行っています。地藏盆は夕刻から提灯のもと人々が集まり、最後は皆で「西国三十三所御詠歌」(写真-4)を歌います。御詠歌というのはいままで歌いなれた唱歌や流行歌と異なり、一つの言葉が抑揚のある、いわゆる節(ふし)を持っており、ながく手こずりましたが、最近いつしか我流ですが楽しんで歌えるようになりました。

かつて枚方時代、地の利を活かし週末になれば京都、大阪、奈良と出かけたことをなつかしく思い出しつつも、昨今はすっかり慣れた農村生活を過ごし、楽しんでいる今日この頃でした。

以上